

へつながらるものである。当面、水素自動車は窒素酸化物による光化学スモッグの発生が懸念される都市中心部での利用が考えられ、一九九八年を目途に開発が進められている。

最後に

私達の住んでいる地球は宇宙の中で希にみる素晴らしい星である。もしこれ以上私達が地球を汚染すれば、自然のサイクルが破壊され、簡単に生物の住めない星に代わってしまう。このため、今年（一九九二年）地球環境サミットが開催され、炭酸ガスの総量規制に対して、また森林破壊の問題等についても対策が講じられ始めようとしている。総論では環境破壊防止に世界中の人々は賛成する。しかし、自国のエゴが見え隠れし、現時点で具体的な合意が得られるに至っていないのが現状である。残念ながら、まだまだ、地球市民時代は来そうにない。私達は子孫のためにこの素晴らしい地球を守らなければならない義務があると思うのだが。

多様なエネルギー体系の中で、水素がクリーン・エネルギー源として登場するのは二十一世紀にならうと予想される。しかしながらその実用化のために、今後水素吸蔵合金の基礎研究を続けて行きたいと考えている。それは、同時に、総合科学部創設理念の一つの学際的研究と考えるからでもある。

「パソンズ・ルネサンス」の到来

法学部政治学講座 高城 和義

社会科学の全領域にまたがる壮大な理論を築いたタルコット・パソンズ（一九〇二～七九）は、「二十世紀アメリカ最大の社会学者」といわれている。近年欧米においては、パソンズへの関心が復活し、現代の深刻な危機と真正面から対決しようとした、ラディカルなリベラリストとして、パソンズを再評価しようとする新たな研究動向が現れつつある。

ステレオタイプ化された パソンズ像

長らく後進的地位にあったアメリカの社会科学が、ヨーロッパを追い抜いて世界第一級の水準に到達したのは、第二次大戦後のことである。この転換の中軸をになつたものの一つが、パソンズの学問にほかならない。彼の理論体系は、経済学・社会学・政治学・歴史学・人類学・心理学・教育学・哲学・精神分析学にまたがる、壮大な「一般理論」であり、難解なことでも有名である。

「パソンズは、今世紀アメリカの中で最も深い洞察力をもった社会学者であった。

だが彼は同時に、最も悪口雑言をあげせられた人であり、明らかに最も理解されなかった人物である」。十三年前、パソンズがドイツで客死したとき、当時四巻本の大部なパソンズ研究書を準備しつつあったアレグザンダは、こう記している。

たしかにパソンズは、一九六〇年代後半以降、激しい攻撃の対象でありつづけた。その結果、パソンズ理論は、過度に抽象的で理解不能な「誇大理論」であり、経験的諸問題から逃避した「非歴史的・非主体的・保守的理論」であるというイメージが定着し、ついには、だれもパソンズを真剣に読まなくなってしまう。かくて「ポスト・パソンズ」が叫ばれるにいたる。

パーソンズへの関心の復活

しかしながらパーソンズ没後、にわかにパーソンズへの関心が復活し、今日「パーソンズ・ルネサンス」ともいえるべき理論状況が、世界大の規模で展開しつつある。なぜこのような変化がおこったのであろうか。筆者のみるところ、一九七〇年代末から八〇年代前半にかけて、「パーソンズ・ルネサンス」をもたらした二つの画期的なできごとがあった。

その第一は、ドイツで、パーソンズ学への関心が、急速に増大したことである。ユルゲン・ハーバーマスが、ウエーバーとパーソンズ理論とを体系的に検討し、「コミュニケーション的行為の理論」を提示しようとしたのは、その象徴的表現である。ニクラス・ルーマンやその他多くの人々もそれぞれ、パーソンズ理論との対話を通して新たな理論を形成しようとする。こうしたドイツでの新しい理論動向は、ただちにわが国にもアメリカ合衆国にも紹介され、大きな反響を引き起こすこととなった。

パーソンズ復興の第二の契機は、ジェフリー・アレグザンダーの四巻本の大部な『社会学の論理』（一九八二〜三）の公刊である。彼は、マルクス、デュルケム、ウエーバーとパーソンズ理論とを詳細に検討し、一般理論への関心をふたたび喚起することとなった。



タルコット・パーソンズ(1974年)

その背景には、「アンチ・パーソンズ」¹¹「ポスト・パーソンズ」を旗印として登場した多くのパラダイム（闘争理論、象徴的相互行為論、エスノメソドロジー、ラディカル・ソシオロジ、等々）が、いずれもみずから理論を体系的に提示しえないまま、その生命力を枯渇させてしまったという事態が横たわっていた。

アレグザンダーは、パーソンズ理論との対話をつづけながら、真の「ポスト・パーソンズ」時代をにやうる一般理論の構築をめざして、「新たな理論運動」を提唱したのである。こうして、一九八〇年代以降、パーソンズ再評価をめざす研究が、陸続として現れてくる。

未公刊資料の発掘・公刊

ところでパーソンズは、膨大な著作とともに、死後、大量の未公刊資料を遺していた。未公刊の草稿・講演原稿・講義ノート・大量の書簡などが、それである。これらは、一七七箱に整理されて、ハーヴァード大学古文書室に保管されている。筆者がこれらの解説に取り組みはじめてから、はや十年の歳月が流れてしまった。かつて奇妙な東洋人が、未公刊資料を独占して読みあさることが可能であったハーヴァード大学古文書室も、パーソンズ復興という新しい研究動向の進展とともに、

30

the general principle seems to be clear. Society should not be a mere collection of individuals each pursuing an independent self-interest ^{or the liberty of the 50} seeking only to minimize restrictions ^{on his liberty} but a company engaged in the pursuit of common goals - which include ~~and do~~ not interfere with the self-fulfillment of individual personality.

3) Equality of opportunity. This is of course one of the most fundamental of our historic patterns, imperfectly realized as it is. It follows from the importance of universalistic patterns in the valuation of achievement. It is perhaps the most powerful single solvent of particularistic attachments which might be a source of division in the community. But, as in the case of civil liberties, perhaps there has also a shift of emphasis if needed. Too often in the past it has been interpreted as equality of opportunity for personal benefit and advancement rather than for achievement and the performance of function. This is not to say that

パーソンズの草稿(1939-40年)

いまや多くの若い研究者が、これら未公開資料を奪い合うようにして読む姿に変わっている。

未公開資料を用いた実証的なパーソンズ研究も現れてきており、パーソンズの草稿もつきつきと発掘・公開されつつある。一九六〇年代後半から七〇年代にかけての激しいパー

ソンズ批判に攻撃の風潮を想起するとき、隔世の感に襲われるほどの、学問状況の変化が進行している。

新たな パーソンズ像をめざして

その結果、パーソンズ学を、「誇大理論」とか、「過度に抽象的で、非歴史的・非主体的・保守的理論」であるとステレオタイプ化されたイメージが、根本的に疑問視されつつある。今日、「パーソンズ解釈は、まだほんの幼児期にある」とか、「パーソンズ克服の必要性」という議論は、少なくともまだ時期尚早である」という主張さえ、現れてきている(ロバートソン・ターナー)。

従来のパーソンズ像とは反対に、パーソンズを、「二十世紀の数少ない真に現代的でグローバルな精神の持ち主」、ラディカルなベラリストとして、さらには「左翼ヒューマニスト」として、描き出そうとする試みが、まさに進行中である。筆者の近著『パーソンズとアメリカ知識社会』(岩波書店)もこうした「パーソンズ・ルネサンス」の理論動向に組みつつ、あらためてパーソンズの理論的遺産を確かめようとするささやかな試みの一つである。

旧ソ連・東欧社会主義の崩壊に示されているように、二十一世紀にむかって、文字通り「神なく予言者なき時代」(ウェーバー)となつてしまった今日、激動する現代世界にたいして知的責任をはたそうとしたアメリカ知識人のリベラルな営みから、われわれはもつと真剣に、多くのことを学ばなければならぬのではあるまいか。